

日刊 動労千葉

84. 6. 22

No. 1672

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五（六・公衆）〇四七二（二二）七二〇七

津田沼 謀略的「ピラハリ」 事件、タレコミ投書 「処分」攻撃等の 意味するもの

「本部」革マル・反動分子・国鉄当局一体の 新たな組織破壊攻撃を許すな！

五月一日、津田沼電車区構内でおこった国労をよそおった謀略的「ピラハリ」事件を契機とした、当局と動労「本部」革マル分子の一体となった戦闘的職場への破壊策動は、動労千葉と国労のき然たる反撃によって完全に破産してしまいました。

馬脚あらわすタレコミ専門の 謀略党派Ⅱ「本部」革マル

動労「本部」革マル送り込み分子Ⅱ嶋田・海宝は、五月一日の「ピラハリ」事件発生と同時に、「国労がやった」なるキャンペーンを張り、当局の処分や権力の介入を引き出すことで動労千葉・国労への組織破壊を策動してきました。

しかし、この間、津田沼職場だけをとってみても、「4・17津田沼武装襲撃」（79年）、「4・15春闘破壊襲撃と当局への処分要請」（80年）、「6・12権力と一体となったデッチあげタレコミ告訴」（81年）を行ってきたばかりか、この間、東洋大学革マル分子Ⅱ嶋田誠の津田沼送り込み（74年）、東京地本極悪革マル分子Ⅱ海宝洋好の送り込み（82年）を行い、一貫して当局・権力と完全一体となつてデッチ上げ・告訴タレコミ・分裂破壊策動・「働こう運動」での当局の飼い犬になり下つており、彼らの ナチスばりの謀略的体質と凶暴さは職場にひろく知れわたつており、今回の「事件」の本質もすぐ全員に見破られてしまったのも当然といえます。

逆に、職場の全員から「あいつらこそおかしい」と問いつめられるや、あわてた彼等は、今度は「職場にウワサされているが、動労が犯人ではない」「犯人は他にいます。自分たちは、犯人を知っている」などと言いつけを始め、一カ月もこの問題から逃げまわっています。

そもそも、電車のつり革一本なくなつても「ボリヤクだ！」、「組織破壊だ！」とわめいてきた彼等が、なぜ今回の事件だけは弾効もせず、謀略だとも言わず、真相糾明の職場の声と動向に必死で水をさそうとしているのでしょうか。

しかも、国労・動労千葉以外の者で内部事情に通じていると思われる相当数の実行集団について、動労「本部」革マルが「犯人を知っている」とはどういうことか。誰を指しているのか。知っているならなぜ言えないのか。

語るに落ちるとはこういうことです。

自民党・経営者・当局と手を組んで
再建フォーラムⅡ経営参加の泥沼へ転落
職場当局は、この事件以降「職場規律の厳正」「服務規程の遵守」等の攻撃を強めています。
六月下旬には「乗客から投書があった」として

服務規程にもない「喫煙」のことまであげつらい「乗務停止、降職」等を言いだしてきました。もちろん、われわれの正当なる職場の闘いで基本的に粉砕したとはいえ、このような反動分子の「謀略」や「タレコミ」を根拠として弾圧を画策しようなどという国鉄当局の反動姿勢を絶対に許すわけにはいきません。

最も重要な問題は、こうした当局の攻撃が動労「本部」革マルの裏切りと率先協力を水路として行われているという事実です。

「職場と仕事と生活を守る」と称し、59・2大合理化に協力して三万人におよぶ労働者の職場を奪つて「過員」へ追いやり、あの鉄労ですら抗議した「レイオフ、出向、退職勧奨」方針を黙ってうけいれているばかりか、自ら「労働強化をいわず」「骨身を削つて国鉄を再建する」とかけずりまわっています。そして遂に、地交線問題を突破口として、自衛隊・米軍の国鉄使用を全面導入することによって自民党や経営者団体と共闘していくという方針を決定し、「国労・動労千葉破壊をとおし、国鉄労働運動の（反動的）主導権を握るんだ」とうそぶいています。

そして今度は、仁杉総裁と佐藤昭松委員長の名で「国鉄再建フォーラム」についての覚え書きをかわし、交渉ではなく（従つて労働条件など一切問わず）ただただ「国鉄の再建のため労使一体の経営参加の立場で話し合いをする」というところまで墮落してしまっています。

まさに自民党と共闘し、権力と一体となることを基本方針とし、経営参加の道を突き進む動労「本部」革マルこそ全国鉄労働者の敵です。

「全国3大問題（Ⅱ拠点）職場」と目して敵が攻撃の焦点にすえている津田沼でのこの間の動向は、その端的なキザシにほかなりません。

動労「本部」革マル ―土屋一派解体・一掃を！

われわれは、動労「本部」革マル、当局と一体となつたこのような卑劣な組織破壊攻撃を断じて許さないために、さらに階級的警戒心を強めつつ職場を防衛するとともに、国労組合員との共闘体制をさらに確立し、何よりもこのナチスマがいの卑劣な謀略党派Ⅱ動労「本部」革マル分子を職場から一掃してしまふことを宣言するものです。